

泊瀬部皇女と忍壁皇子に奉る歌

—— 柿本人麻呂作歌注釈3 ——

森 朝 男

柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌

柿本朝臣人麻呂の、泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献る歌

飛鳥 明日香乃河之上瀬尔 生玉藻者 下瀬尔 流觸經 玉藻

一首并に短歌

成 彼依此依 靡相之 孀乃命乃 多田名附 柔膚尚乎 劍刀

飛鳥の 明日香の河の上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流

於身副寐者 烏玉乃 夜床母荒良無(一云 阿礼奈牟) 所虚故 名

れ觸らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡合ひし つまの命の

具鮫兼天 氣田敷藻 相屋常念而(二云 公毛相哉登) 玉垂乃 越

たたなづく 柔膚すらを 劍刀 身に副へ寐ねば ぬばたまの

能大野之 且露尔 玉裳者涅打 夕霧尔 衣者沾而 草枕 旅宿

夜床も荒るらむ(一に云ふ あれなむ) そこゆゑに 慰めかねてけ

鴨為留 不相君故 (2・一九四)

だしくも 逢ふやと思ひて(二に云ふ 君も逢ふやと) 玉垂の 越智

反歌一首

の大野の 朝露に玉裳はひつち 夕霧に 衣は沾れて 草枕 旅

敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛将相八方(二云 乎知野尔過奴)

宿かもする 逢はぬ君ゆゑ (2・一九四)

(2・一九五)

反歌一首

右、或本日、葬河嶋皇子越野之時、献泊瀬部皇女歌也。日本紀云、

敷袴の袖かへし君玉垂の越智野過ぎ行くまたも逢はめやも(二に云

朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑、淨大參皇子川嶋薨。

ふ 越智野に過ぎぬ) (2・一九五)

右、或る本に曰く、河嶋皇子を越智野に葬る時、泊瀬部皇女に献

る歌なりといへり。日本紀に曰く、朱鳥五年辛卯秋九月己巳の朔の丁丑、淨大參皇子川嶋薨りましぬといへり。

【語釈】

○泊瀬部皇女 天武天皇皇女。天武紀二年二月条に穴人臣大麻呂の女かぢひめ媛娘所生の二男二女の中に第一女として見える。天平十三年(七四二)三月二十八日に薨(統紀)。長谷部内親王とも。

○忍坂部皇子 天武天皇皇子。泊瀬部皇女の同母兄弟。上の天武紀の記事の二男二女の第一男として見える。この二男二女は男女別に名を列擧するので、皇女の兄か弟かは分らない。天武朝に、川嶋(河嶋)皇子らと「帝紀及上古諸事」の記定に当り、文武朝には藤原不比等らと律令の撰定に當つた。万葉集によれば、柿本人麻呂とは特に親密な関係にあり、作歌や人麻呂歌集歌の中に幾つか皇子への献歌が見える。阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』は、人麻呂が皇子宮に仕えたことがあると推定する。慶雲二年(七〇五)五月七日薨。薨去の記事に「天武天皇第九皇子」とある(統紀)。忍壁皇子・忍壁親王・刑部親王とも。

○献る歌 挽歌ながら「献歌」と記したものは珍しい。注釈の多くは左注によってこの歌を河嶋皇子への挽歌とし、河嶋と泊瀬部は夫婦であつたとする代匠記の説に依っている。また泊瀬部・忍坂部の

二人に献じられたのは、同母の兄妹(または姉弟)として二人が親密であり、あるいは同所に住んでいたことによる、と推測されている。しかしさらに「献」の意義を重視して、忍坂部皇子または泊瀬部皇女が詠むべきものを、人麻呂が代作して献じたのではないか、との推論もなされる。そのうち代表的なものは橋本達雄『万葉宮廷歌人の研究』第三章の二「献呈挽歌」の所説で、長歌の前半を忍坂部が、後半以降を泊瀬部が歌う形に作つたとするものである。この説については以下にもふれる。また以下に詳述するとおり、河嶋皇子の挽歌となる前に、粉本となつた亡妻叙事詠が存在したようであるが、それがこの二人の皇子女との係わりにおいて成立したものの可否は分らない。

○飛鳥の明日香の河 現奈良県高市郡の明日香川。「飛鳥の」は明日香の枕詞であろう。掛り方については、天武紀朱鳥元年七月二十日条に「改元して朱鳥元年と曰ふ。仍りて宮を名づけて飛鳥淨御原宮と曰ふ」と見えることから、祥瑞の朱鳥を「飛鳥」といい直したことに発したとする説(古事記伝)が有力であるが、この宮号が朱鳥より古い金石文にも見えるとする伴信友の反論もある(長等の山風付録三)。金井清一「枕詞『飛鳥』四音考」(金井『万葉詩史の論』)は、集中「明日香」に掛けた枕詞の例はすべて「飛鳥」で、助詞の表記を省いていること、東大寺要録所収歌中の「とぶやとりあす

か」の例について、「とぶとりの」から「とぶやとり」は派生しにくくいこと、などを論拠に、トブトリと四音に訓むべきだと主張する。傾聴すべき意見ではあるが、四音の例は比較的に成立の古い枕詞に見られる。しかるにこの枕詞は人麻呂の歌を初発とし、五七定型が十分に支配的になった時代に成立したものである。「飛ぶ鳥の」の五音であった可能性も、簡単には否定しきれないのではないか。しばらく旧説による。

○上つ瀬に生ふる玉藻は下つ瀬に流れ觸らばふ 川について上つ瀬・下つ瀬の二つを出すことは常套。「隱国の 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杖を打ち 下つ瀬に 真杖を打ち」(記九〇)、「飛鳥の明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡し 下つ瀬に 打橋わたす」(一九六)など。「觸らばふ」は「上つ枝の 枝の末葉は 中つ枝に落ちふらばへ」(記一〇〇)の例がある。「触る」の継続形か。

○玉藻なすか寄りかく寄り靡合ひし 「玉藻なす」は「寄る」の枕詞。「くなす」は形容句的な枕詞を作る辞。「靡相之」はナビカヒシと訓じる。ナビカヒは靡キ合ヒのつづまったものであろう。玉藻のようにと寄りかく寄りして靡き合った。人麻呂には「波のむたか寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹」(二・一三二)、「玉藻なす靡き寝し子」(二・一三五)、「吾が大王の立たせば 玉藻のまころも 臥せば 川藻のごとく 靡合ひし 宜しき君が」(二・一九六)など

がある。最後の例は、男女ともに靡き合う様のようにも見え、この表現は、女が一方的に靡き寄るのばかりをいったとは限らない。こも「靡合ひし」であるから男女双方の靡き合う姿態をいったとされる。「靡く」は、「うち靡き眠も寝らめやも」(一・四六)、「うち靡き床にこい臥し」(一七・三九六九)などの例が見え、寝姿をいうものらしい。したがってこの「玉藻なすか寄りかく寄り靡合ひ」は、共寝する二人の姿態を形容したものと思われる。「なびかふ」は「靡き合ふ」の略。

○つまの命の 「つま」は妻をも夫をもいう。「みこと」は敬称。この歌はこの敬称以外に、全く敬語を用いない。この一句の解釈はおおよそ三説に分れる。まず第一に、「つまの命」を死んだ夫河嶋皇子とし、「の」を連体格とするもので、古注以来支配的な解釈である。近年では全集・新全集・新大系などが採用する。続く「たたなづく柔膚」を皇子の若い膚として、妃である泊瀬部皇女が、夫の河嶋皇子の柔膚を身に添えて寝ないので、妃の夜床は荒れているだろう、の意と解するのである。第二の解釈は「つまの命」を河嶋皇子としながら、「の」を主格とし、玉藻のように靡き合った夫の命河嶋が、(妻泊瀬部の)柔膚を身にそえて寝ないので、夜床は荒れているだろう、と解するもので、大野保「つまの命のたたなづく柔膚」(『萬葉』二四)に始まり、大系・集成・全訳注・釈注など、近年こ

の説をとる注釈が多い。第三は「つまの命」を泊瀬部皇女のこととし、玉藻のように寄り添って寝た妻の柔膚すらを、身に添えて寝ないので、死者河嶋皇子の夜床は荒れているだろう、の意とする。全注釈に始まり、西郷信綱『萬葉私記』もこの説をとり、近年では全注が従う。これら三説のうち第二の説は「つまの命」の「の」を主格とし、次の「たたなづく柔膚」へ続く連体格ととらないところ、文脈としてやはり不自然であるというほかにない。第一の説は文脈的には最も通りがいいけれども、「つまの命の柔膚」が夫(男)の膚となるのが難点である。第三の説は意味の上では第二の説と等しくなる。当面最も難が少ないように見えるが、第二の説ともども後出の「夜床も荒るらむ」を死者の寝床と解さねばならなくなる。その項で述べるとおり、これは意外に大きい難点であると思われる。この歌の情況が逆で、妻を失った男を詠むものであったら、第一の解は、非常に明快に、妻が死んで、生き残った男の夜床は荒れているだろう、の意となり、以下にも順次説くとおり、ほとんど難点のないものとなる。あらゆる疑念が解消する。その点からして、この歌はそもそも、妻を失った男の嘆きを詠む歌(儀礼歌でなく、物語的な歌)を粉本としたものであったと考えてみてはどうだろうか。この歌に敬語がほとんど用いられないのは、この歌の表現の素地(それは粉本の姿による)が、儀礼挽歌でなく、物語的な悲恋の叙事詠で

あったからではないか(釈注も敬語のないことについて、この歌の物語的趣向を指摘している)。だとすれば、唯一の敬称「つまの命」で呼ばれる相手は、死者以外ではありえない。土井清民「河嶋皇子挽歌」(山路平四郎、窪田章一郎編『柿本人麻呂』所収)に指摘があるところ、この「孀の命」はさほど厳格な敬称ではない。山上憶良の日本挽歌には、死んだ妻を「うらめしき妹の命」(5・七九四)といい、大伴家持の弟の死を悼む歌には、弟を「はしきよし汝弟の命」(17・三九五七)という。呼びかける詠み手が夫であり、兄であるから、「妹」「汝(弟)」という二人称のない方をする。対してこの歌は「つまの命」と、第三者的ない方になっている。妻を失った男の嘆きを詠む原型が、男みずから詠む形であったか、第三者から詠む形であったかは、実は微妙であるが、「つまの命」となっているので、ひとまずは第三者詠の形と見ておく。但し、その第三者は物語的な亡妻叙事詠の詠み手であるから、主人公と一体化しやすい。詠んでいくうちに主人公が憑依してしまうのだ。三人称から一人称への転換である。人麻呂の「吉備の津の采女の挽歌」や虫麻呂の「菟原処女の墓を見る歌」などにその傾向の見られることはすでに論じた(森『古代和歌の成立』第三章の2「柿本人麻呂とその(語り歌)史」)。このこと後の「またも逢はめやも」の項にもさらに述べる。さて、こうした原型の存在を想定するなら、河嶋皇子挽歌としてのこの歌

の解は、どんなに不自然でも、「嬬の命」を河嶋皇子と見る第一の説によらざるをえない。しかしこの歌の伝承の過程にあつて、第三の説の如き理解をした享受者がいなかったという保証はないから、第三説を完全に締め出すこともない。第二説だけは好ましくない。

○たたなづく柔膚すらを「たたなづく」は「たたなづく青垣」（記三〇）の例がある。たたなわり連なる意で、青い山並を形容したものであろう。ここは寝姿の膚のしなやかな屈曲を、山並に似たものと見て掛けたのであろう。「柔膚」は当時「やは」という語の存在が定かでないので、ニキハダと訓むのがよいだろう。「すら」はここでは強意。柔膚こそを。伴侶との共寝の得られないことを最大の寂しさ（床荒れの原因）として強調するのである。「たたなづく柔膚」はやはり女の膚であらう。原型は妻を失った男の嘆きの歌として、これは女の膚をいったものであったのが、河嶋皇子の死を詠むものに改作転用された、ないしは河嶋皇子の死を詠む歌という伝承が生れた過程で、河嶋皇子の男の膚を指す理解が生じたものであろう。

○劍刀身に副へ寝ねば「劍刀」は「身に副ふ」の枕詞。自分の身に添えて寝ないので。ここには敬語の助動詞・補助動詞が見えない。「寝ねば」の主格である泊瀬部皇女または泉下の河嶋皇子に対して敬意が払われていない。この疑問を正当に取り上げ考察を加えた論としては、橋本達雄『万葉宮廷歌人の研究』（第三章二）がある。橋

本説はこの直後の「夜床も荒るらむ」でこの長歌は二分され、前半を忍坂部皇子が、後半を泊瀬部皇女が、いわばデュエット形式に詠むように構成したものとするのである。とすれば、この部分は忍坂部皇子が亡き河嶋に語り掛けていることになる（橋本説は「つまの命」については前記第三説をとる）から、臣下の人麻呂と異なり敬語を用いる必要はなくなる、というのである。一首の長歌を二人で詠むように構成したものは他にも見える。また題詞に泊瀬部・忍坂部の二人に献じたとする不可解も、これによれば解消するなど、橋本説は、この挽歌の読みとして画期的なところがある。これに対し身崎壽「柿本人麻呂献呈挽歌」『万葉集を学ぶ』第二集は、身分差のない皇子同士でも、死者に対して敬語を用いないのは不審であるというが、別な提言をするには至らない。この点については、「嬬の命」の項に述べたとおりである。

○ぬばたまの夜床も荒るらむ「夜床」はここは夫婦の床。「荒る」は寂しくすさむこと。夜床も荒れずさんでいるであらう。この「夜床」は、上の「つまの命」を、その項に掲げた第一の説によって死者河嶋ととれば、生者泊瀬部の床となり、第三の説によって生者泊瀬部ととれば死者河嶋の床となる。第二の説をとるものは二種に分れ、大半は河嶋の床ととっているようであるが、釈注は生者泊瀬部の床としている。第二の説はたださえ晦渋な文脈になるが、さら

に一つ複雑さを加えた感があり、主語が二転三転する文脈は、詠唱を耳で聞いた場合には、理解しえないのではないか。しかし逆に釈注がそのような不安を越えてあえて泊瀬部の床としたのには、やはりここは生者の床でなければおかしい、という判断が存したからではないのか。そもそも、死んだ男の寝床が、この世に残した妻と共に寝ができないで荒れる、ということはいうものだろうか。逆に、妻に死なれた男の寝床が荒れる、ということはいいいうことであろう。泣血哀慟歌の反歌に「家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕」(2・二二六)とあるのがそれを想像させる。この歌の粉本に、やはり亡妻挽歌ふうの男の嘆きの歌があったと考えるのがよくなってくる。

○一に云ふ あれなむ 「荒るらむ」の別伝。きつと荒れるであろう。未来を目掛けた表現である。

○そこゆゑに 慰めかねて それゆゑにわが心を慰めかねて。主語は後の文脈からしても泊瀬部である。前の「夜床」が死者の床であるとする、死者の寝床が荒れるのが、生者である妻にとつて辛く、心を慰めかねるものである、ということなる。死者が楽しまないと生者も辛い、という論理があったかもしれないが、どうも不安だ。前引橋本説は、ここからの後半部を泊瀬部皇女が唱和する部分と見、忍坂部皇子が、妻と共に寝ができないために冥界の河嶋皇子の寝床は

荒れているだろう、と想像したのを受けて、「それゆゑに(私は)慰めかねて……」といったと説く。筆者は永く橋本説に共鳴し、全面的にこれに従い、何度も自論に引用してきた。その間、この点にはやや疑念を感じないではなかったが、しかしそれを克服する手だてが見つからなかった。いまこの歌が亡妻を嘆く男の歌を原型に持つものという一案を抱いて、この点を見ると、前段の荒れた「夜床」の主と、この「慰めかね」る心の主を同一人物とし、しかも生者とする可能性が開けてくるように思う。一方この「慰めかねて」を我が心を慰めかねるのでなく、生者泊瀬部が死者河嶋の心を慰めかねることと解することもできないが、以下に死者との再会を願って、追いかけてその墓所まで行くというのが、通りにくい。自分が心慰められず、再会を願って出掛けるのでなければ、露や霧に濡れて野に宿る切実味は浮き上がってしまうだろう。

○けだしも 逢ふやと思ひて もしや(亡くなった河嶋皇子が)ひよっこり自分に出逢うことがあろうかと思つて。新全集の頭注に、A、B二逢フとB逢フとは全く意味が異なり、後者はBが主語で姿を表わすことをいうとしながら、ここは二云の別伝(B逢フ型)と区別して前者に解しておく、としている。相手を主語にとつた逢フは偶然の出逢いであり、それは神・靈・魔などの出逢いを表現するところに発したものであることすでに説いた(森『古代和歌と祝祭』

所収「逢ふ」。こゝも死者の靈のような類との偶然の出逢いを期待したものだから、この「逢ふ」は相手、すなわち死者を主語と見、不意に思いがけぬかたちで、死者の方から逢いに来ると解したほうがよい。

○一に云ふ 君も逢ふやと 「逢ふやと思ひて」の別伝。もしや君がやって来てひよっこり出逢うだろうかと。「君」は主語である。君（死者河嶋）がやって来て生者泊瀬部に出逢うのである。相手は死者だからこちらの意思どおりにはならない。こちらからは想像できない相手の意思で出逢うのである。神靈との出逢いはこちら側からは常に偶然なものではない。それがこの相手を主語にする表現である。敬語がないが、ここはなくても許される範囲であろうか。

○玉垂の 越智の大野に 「玉垂の」は、玉垂の緒といういい方から地名の「越智」にかけた枕詞という。越智は奈良県高市郡高取町越智。いわゆる佐田丘陵の西側で、現在も斉明天皇や太田皇女（天智天皇皇女、天武天皇妃）の陵墓が伝わる。左注によればその近辺に河嶋皇子の墓もあったのであろう。「大野」は人の踏み入らない原野をいうようである。そういう野でこそ神靈や魔に出逢う。ここでは死者に出逢おうとするのである。

○朝露に 玉裳はひづち 朝の露に美しい裳を濡らして。「ひづち」は終止形「ひづつ」。泥にまみれる。水に浸る。次の二句「夕霧に

衣は沾れて」と対句をなし、併せて野での宿りであることを強調する。

○草枕 旅寝かもする 逢はぬ君ゆゑ 「草枕」は草を枕に寝ること。「旅」にかかる枕詞。旅寝をすることか、逢えない君ゆゑに。

死者河嶋皇子とのゆくりない逢いを期待して、死者の赴いた越智の野に出かけ、そこで一夜の宿りをするのである。実際には墓前に宿直して靈を祀ることなどをいったのだろう。全注に「夫君を尋ね求めてやまない皇女の心」を表現したもの、といい、釈注に「苦勞をして、皇女は皇子を追い求めている」ことを表現したもの、といっているが、旅寝にはいまい少し深い意味が隠されているのではないか。夜を過すのは死者との交霊の時間が夜にあつたからである。そしてその交霊とは、死者と共寝することでもあるから、夜でなければならぬのである。安騎野遊獵歌（I・四五～四九）における軽皇子も、安騎野に来て亡き父日並皇子との交霊の夜を過し、翌朝、自身の身を通して、亡き日並の再生を実現するのであつた（森朝男『古代文学と時間』所収の「朝」）。だいたい、幽明境を異にして夫婦共寝のできなくなったことを、嘆いて逢いに来たのだから、ここには共寝の夜が期待されて当然なのである。そしてこの共寝（交霊）は死者を再生させる試みをも意味している。「逢はぬ君ゆゑ」は、尋常には出逢うことない君ゆゑ、の意。この「逢はぬ」も「君」が主語である

と考えてよい。先に原型と想定した亡妻叙事詠では、この「君」は「妹」ないしは「子ら」などとあったのだろう。

○敷袴の袖かへし君 「敷袴の」は衣・袖・枕などにかかる枕詞。「かへし」は交す意の「かふ」に過去の助動詞「き」の連体形「し」。袖を交した君。袖交して共寝を重ねてきた君、の意。このことを強調するには、呼び戻そうとする呪的な意図が潜む。原型では「君」は「妹は」「子は」などとあった。

○越智野過ぎ行く 越智の野を通り過ぎて行く。古代の死出の旅のイメージは、家を出、里を後にし、野を通り過ぎて、山に入るのである。それゆえこれは死者があゝの世へ入り行くことを表現したものである。現実的には、越智の野が殯や葬礼の場であり、その奥の越智の丘陵（山）が墓所であったのだろう。

○一に云ふ 越智野に過ぎぬ 「越智野過ぎ行く」の別伝。越智の野に亡くなった。越智野に逝った。「過ぐ」は前項にいったように、本来は、死出の旅行きをいう語であるが、人麻呂は、何処其処を過ぐ、などといわずに、死ぬことをただ単に「過ぐ」ともいい、頻繁に用いている。いわば「死ぬ」の歌語といってもよいような地位をこの語は獲得させられているのである。この別伝の方の「過ぐ」はその例であり、その点において本伝との間に異なりを持っている。○またも逢はめやも また再び逢うことがあるうかなあ、いやない。

ここに至って死者はいよいよ手放される。この「逢はめ」の主語は、あえて死者の方といわねばならぬほどでない。近江荒都の歌の反歌の「昔の人にまたも逢はめやも」（一・三二）の例に対応させてみると「君に」またも逢はめやも」で、こちら側が主語であると見るべきだろう。長歌の後半からここまで、ほとんど泊瀬部皇女の位置から詠んでいるような口ぶりである。「つまの命の」の項に述べたように、第三者の位置から読み始めた歌が、途中から死者を最も強く追悼する者である配偶者「われ」の表現に接近してしまうのである。これは死者との交霊が男女の性的関係を通してこそ実現しやすいと思われていたからだ。神との交わりも巫女と神との神婚を通して実現する。それと同じである。第三者からの追悼の形の歌でも、配偶者の残された悲しみを強調するのは、その理由による。人麻呂の「吉備の津の采女の挽歌」も、虫麻呂の「菟原処女の墓を見る歌」も、第三者の立場で詠み出しながら、後に残った配偶者の悲しみを詠み、途中から死んだ女を「妹」「我妹子」などと詠んで、あたかも配偶者である夫が詠むように変化している。これもその様相を見せているが、しかしこの歌の場合は、最後まで第三者からの表現として読むこともできる。何れとも特定せずに、その微妙のままを読みとるほかにない。身崎壽「柿本人麻呂献呈挽歌」は、一人称的とも三人称的とも見うるが、さらに「一人称的に泊瀬部皇女に

呼びかけたもの」とも見られるという『万葉集を学ぶ』第二集。また土井清民前掲論は、この歌を泊瀬部が詠む形に作つた代作歌であるとし、前半は泊瀬部への「讚美の色彩」を帯びたために第三者的な表現になったと説く。

○河嶋皇子 天智天皇の皇子。天智紀七年二月条に忍海造小龍の女の色夫古娘所生の一男二女の第二に見える。天武朝に忍壁皇子らと「帝紀及上古諸事」の記定に当つた。持統五年（六九二）九月九日薨。

万葉集には持統四年の紀伊行幸時の歌が見える（一・三四）が作者の所伝は山上憶良と紛れる。懐風藻に詩と伝があり、伝には初め大津皇子と莫逆の契りをなしたが、大津の謀逆に及び変を告げたので、朝廷は忠を嘉したが朋友は薄情を難じたと記す。川島皇子・河島皇子・河島王なども。

【口語訳】

明日香の川の上流の瀬に生う藻は、下流の瀬に靡き流れて、互いに触れあう。そのように右へ寄り左へ寄りして靡き寄り合つた、夫（原型 妻）の命のしなやかに連なる柔肌をこそ、身につけて寝ないので、妻（原型 夫）の命の夜の床はすきんでいるだろう（別伝 すすんでいってしまうだろう）。それゆえに妻（原型 夫）は自分の心を慰めかねて、もしや逝ってしまった人がひよっこり自分に出逢つて

くれることもあろうかと（別伝 君が出逢ってくれるかと）、越智の荒野の朝露に裳を浸し、夕霧に衣を濡らして、旅寝をすることか。逢わない夫（原型 あの子）ゆえに。

反歌一首

袖を交した君（原型 あの子）は、越智の野を過ぎて山に入った（別伝 越智の野に亡くなった）。再び逢うことがあろうか。もはやない。

【補説】

この挽歌が、右に注してきたように、どうして亡妻叙事詠と見られる原型を奥に潜ませているのか、またその原型はこの挽歌とは異なるどのような成立背景を持つのか、などは分らない。死者が女性であるから、一案として、忍坂部皇子の妻であつたらしい明日香皇女を悼む挽歌であつたと見ることが出来る。万葉集はこの後に明日香皇女の殯宮挽歌（人麻呂作）を載せている。しかしこれはあくまで一案であるに過ぎない。それより大切なことは、人麻呂の作歌群の根底に、亡妻叙事詠ともいふべきような語り歌の類型が横たわっていると思われることである。その類型は「泣血哀慟歌」や、采女の死をその夫の嘆きに主眼をおいて詠む「吉備の津の采女の挽歌」などに最も具体的に達成されているが、実は儀礼歌的色彩の濃い皇子女の挽歌にもこの性格が連続していて、明日香皇女の殯宮挽歌な

ども夫（忍坂部皇子か）の嘆きが強く表現されている。

河嶋皇子の挽歌とされるこの歌の場合は、後に残されるのは妻であり、亡妻叙事詠とは関係しなくなるはずなのに、よく窺うと、このようにやはり妻の死を嘆く歌の表現が素地をなしているようだ。同様の例は卷三挽歌部の歌で人麻呂作の異伝を持つ「同じ石田王の卒りし時に、山前王の哀傷ひて作る歌一首」（3・四三三）にも認められる。久しく仲むつまじく暮そうと、替余の道を（泊瀬へ）通い続けた男を、「萬世に 絶えじと思ひて 通ひけむ 君をば明日ゆよそにかも見む」と嘆くが、文脈上は、「君をば明日ゆ」を、「妹をば明日ゆ」として、久しく通い続けようとしたのに、その通い先の妻が死んでしまった、とある方が自然である。この長歌に付随する或本の反歌二首（3・四二四、四二五）も女の死を詠むもので、左注に「或は云ふ」として紀皇女薨去の折の歌であると伝える。悲恋の果てに妻を死なせて嘆く男の叙事という類型が、人麻呂の詩囊中に多量に眠っていて、それをもととして、人麻呂の皇子女らの挽歌は成立してきたという事情があったのではないだろうか。人麻呂の歌の表現の素地というものが、必ずしも儀礼歌的なものばかりでなく、記紀の悲恋や反逆の伝承を継承するような、物語的な叙事詠（それを「語り歌」と呼んでおきたい）に繋がるものであったことが注意される。

【追記】本稿脱稿後に刊行された二つの当該歌論が、管見に入った。駒井陽子「泊瀬部皇女・忍坂部皇子への献呈挽歌」『セミナー万葉の歌人と作品』第三卷 一九九九・一二 和泉書房）と木村康平「人麻呂『河嶋皇子挽歌』論」（戸谷高明編『古代文学の思想と表現』二〇〇〇・一 新典社）である。

前者は、長歌の前半部を忍坂部が、後半部を泊瀬部が詠む形に作ったものとし、「つまの命のたたなづく柔膚」は泊瀬部皇女の膚、「夜床」は生前の夫婦の床とする。「身に副へ寝ねば」の主語は当然河嶋になる。後者は長歌全体を第三者の位置から詠むものとするが、この部分の解を前者とほぼ等しくする。両者とも示唆深いが、自分が死んで自分らの夜床が荒れる、ということになる点にはやはり疑念が残る。

（本学教授）